

『大震災のなかで 私たちは何をなすべきか』再読

昨日のレポートでも書いたが、「3・11」関係の本を手当たり次第に読んだ。なかでも大震災から3ヶ月後に刊行された表題と写真の一冊は、いまでも記憶に残る。あれから4年の歳月を振り返るために、ざっと再読してみた。

本書カバー裏から。「2011年3月11日、東日本を襲った大震災は、何を問いかけているのか。大きな悲しみや喪失感のなかで新しい歩みを始めてゆかねばならない被災者・被災地に、私たちはどう向き合い、どんな支援をしていったらよいのだろうか。現地で活動を続けた医師やボランティアをはじめ、作家や学者ら33名が震災の意味、復興の形をつづる。」本書は「3・11は何を問うているのか」「命をつなぐ」「暮らしをささえる」「復興のかたち」の4部から構成されている。

経済評論家の内橋克人さんの「序のことば」が、なんともいっても心に響く。最初の方だけでも紹介したい。「災害はそれに襲われた社会の断面を一瞬にして浮上させる。東北、北関東一带を見舞った地震、津波、それに追い打ちをかける原発事故の『巨大複合災害』は、日本という国と社会の実相を余すところなくさらけ出した。滅多なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない。災害に打たれた被災者への救済のあり方、人権意識、復興の進め方、すべてが生身の人間を取り巻く現実となる。私たちはどのような国と社会に生きているのだろうか。」

「巨大地震、津波の爪痕は人びとの眼に癒しがたい無惨を刻んだ。地震、津波、自然災害が呑み込んだおびただしい数の『サドン・デス』(突然の死)の悲しみは尽きることがない。深い祈りの沈黙のなかに私たちは沈み込む。けれども、それにつづく原発事故が天空と大地に放った放射能は、音もなく、臭いもなく、色もなく、そして何よりも、生きるものに対して『スロー・デス』(時間をかけてやってくる晩発性の死)をもたらす。“フクシマ”から半径20キロ圏内の『警戒区域』で人は何を見るだろうか。突然の避難命令によってふるさとを追われた人びとは、それに先立つ巨大地震・津波で一瞬に消えた親、夫、妻、兄弟姉妹、子ども、親類縁者、知己の姿を求めて被災地を彷徨することもできない。進入する者を阻む警戒柵によって遮断され、排除され、その日までそこにあった『わがふるさと』に踏み入ることが許されない。格別の捜索隊の手で見出された亡骸との対面もDNA鑑定という責苦に耐えなければならない。この無惨を、私たち、私たちにつづく幾世代もの日本人は赦すことができるだろうか。」

内橋さんの心に迫る「ことば」から、この4年間を振り返っていきたい。

(2015年3月12日)

